
長いお別れ

戸井田 康

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長いお別れ

【NZコード】

N9787E

【作者名】

戸井田 康

【あらすじ】

大学の長い夏休みが終わり、実家からアパートに帰った主人公が、そこで見たものは恋人の変わり果てた姿だった。

小さな田舎の無人駅から、

その地方の中核都市に向かつた。

その駅から新幹線を

横目で見ながら鈍行に乗り込んだ。

長い夏休みがもうすぐ終わる。

ゆっくりと各駅停車で進む列車の中で
僕は退屈な小説を読んだ。

退屈な小説は、退屈な小説でしかなく
すぐに飽きてしまった僕は

本を置くと、車窓を眺めた。

流れしていく田舎の風景を見ながら
君の事を考える。

いつも、君の事を考える。

どんなときも、君の事を考える。

列車は大きな川を渡り、小さな山と大きな街をいくつも越えて
君の待っている街に近づいていく。

君と僕の住む街にだ。

車窓を見ながら、一月ぶりに会つ君の髪のことを考えた。

休みの間、伸ばすと言つていたきみの髪が、
どの位長くなつたのか楽しみだった。

各駅停車の列車の歩みはとても遅かつた。

僕はこの列車選んだのを後悔した。

早く君に会いたかった。

小さな町や、大きな駅に停車しながら
列車は進んでいった。

日が傾いてく。

夕方には、

僕と君の街に帰れる。

そし手、君にあえる。

西日が窓から入り込んできた。

僕は眩しくて目を閉じた。

まばゆい光の中、

君の姿が見えたような気がした。

僕は西日に包まれながら、
いつの間にか眠ってしまった。

大きな音で目を覚ました。

特急が、僕の鈍行列車を追い越していく音だった。

携帯を見て今何時か確認した。

着信が二件入っていた。

君からの発信だった。

きっとかかる時間が何時になるか
聴きたくてかけてきたんだと思った。

僕はリダイヤルした。

君は出なかつた。

僕と二人で食べる

夕食の買い物に夢中になつてているのだろう。

そういう娘だった。

何かに夢中になると

他の事には目が向かなくなる。

僕はいつも考え方をしながら歩く君を
車に轢かれないように

気をつけながら、いつも

君のそばを寄り添つて歩いた。

僕は携帯を閉じると

列車の外に視線を戻した。

大きなビルが見えてきた。

駅から、格幹線道路に伸びる

空中回廊を渡り、バスター・ミナルに降りて

僕たちの町に向かうバスにのった。

もうすぐ君に会える。

バスは大学通りに入った。

僕は髪が長くなつた君の

とびきりの笑顔を想像しながら

バスを降りた。

笑顔がこぼれた。

バス停を降りると

長い坂を上つた。

大学の横を通り抜け

更に上る。

この坂を上りきると

夜景のきれいな高台に

僕たちの小さなアパートが建つてている。

僕は坂を上りきつた。

僕たちのアパートが目の前にあった。

二階建ての小さなアパートだ。

僕は大きなため息を吐くと、
両手に抱えた荷物を置くと、

夜景を見た。いつ見てもきれいな眺めだ。

僕はもう一度、僕たちのアパートを見上げた。

僕たちの部屋は、二階の角部屋。

明かりがついていた。

君の声が聞こえてきそうだ。

僕は再び君のとびきりの笑顔

心を許した者にしか見せる事のない

そのとびきりの笑顔を思い浮かべながら

僕は階段を上った。

君を驚かそうと、

音を立てずにそっとゆっくり。

ドアの前に立つて、

音を立てないように鍵を開けた。

ドアを開けた。

玄関のすぐ横にある

台所に君はいなかつた。

仕方なく、君を驚かす事をあきらめた僕は
声をかけた。

「ただいま」

返事がない。

明かりはついている。

君のお気に入りにパンプスが

綺麗に並んでいた。

僕は僕たちの部屋に入つた。

台所を抜け、居間と台所を分ける引き戸を開けた。

君はその部屋にいた。

君は天井から
ぶら下がっていた。

両手から荷物が落ちた。
大きな音がした。

音の余韻は

永遠に続くようになつまでも響いていた。

僕はその場に座り込んだ。

僕はその場で君を見上げた。

君は俯いて、静かに揺れていた。

首吊り死体が醜いなんて
それはうそだ。

君は綺麗だった。

とても綺麗だった。

とても陳腐な言い方だけど
眠っているみたいだつた。

今にも目を覚まして

「おかえり」って
言い出しそうだつた。

検視官は、

君が死んだっていいてる。

死んだ時間は今日の夕方だつて

君が僕の携帯に発信した時間だ。

何故、それに気が付かなかつたんだろう。

僕が、それに出でていれば、君は死ななかつたかもしけれない。

僕が新幹線で帰つていたら、

君は死ななかつたのかもしけれない。

君がいなくなつたこの部屋は
とんでもなく、広く感じる。

君と暮らした六畳と台所と風呂しかないこの部屋が
遭難してしないそつなほど、
広く感じる。

僕はその広い部屋に
住み続けた。

友人たちは恋人が自殺した部屋なんて引越せと言つけれど
君が死んだ部屋だ。
引越す理由がない。

大学を卒業するまでの三年間、

僕は君がぶら下がつた天井を見詰めながら眠つた。

君がいなくなつたと同時に。
僕の中から、言葉が消えた。

僕は誰とも、話さなくなつた

そんな僕から

友人たちも、少しづつ
僕から離れていった。

僕は一人で暮らした。

一人で授業を受け、

一人でレストランで食事をして

一人で映画を見て

一人で眠った。

それは大学を卒業してからも
変わらなかつた。

あれから二十五年たつた今でもか変わらない
僕はあれからずっと一人で暮らしている。
きっと、これからもそうだ。

何故、君が死んだのかは分からない
誰にも分からなかつたし
僕にも分からない。
きっと、君自身にも
分からなかつたと思う。

僕はそのとき以来、心の中の
いろんなところが壊れてしまつていて。
それを修復しようとは思わない。
君が壊したところだ。

直さなければならぬ理由はない。

僕の残り少ない友人達が
僕に対して

違和感や変わったところを感じるのは
その為だ。

僕は年をとった。
もうロックするには遅すぎる。

でも

死ぬのには早すぎるんだ。

僕は今、

二十五年振りに

国見の丘に立っている。

君と住んだアパートのあつた場所に立つて夜景を眺めている。
今は更地になつていて。

夜景は今も変わらずとても綺麗だった。

百万人の人間が住む都市の夜景だ。
百万人分の明かりが見える。

ある者は幸福な人の家の明かりだし、
勿論、そうでない家の明かりもある。

僕はそれを見ながら

泣いた。

君を思い出して泣いた。

二十三年ぶりに泣いた。

僕は君の事で

初めて泣いたのは
君が死んでから一年後だった。

僕の部屋に後輩の女の子が尋ねてきた。

何故、彼女が尋ねてきたのかはわからない
きっと変わり者の僕の噂を聞いて
見てみたくなったのだろう。

そのこに初めて君の事を話した。

そのこには、どんなことでも話すことができた。

一晩中、僕はその子に

君の事を話し続けた。

話し終わると

僕は泣いた。

君が死んでから

初めて泣いた。

僕は初めて君の為に泣いた。

そして今、

僕は君の為に泣いている。

二十三年振りに泣いている。

君と暮らした、この場所で。

もう少しだ。

僕の一族は、皆

七十歳前後で死んでいる。

長生きはしない血筋だ。

もう少し

この痛みと、孤独に耐えれば

君にあえる。

君は僕を見つけて笑ってくれるかな。

僕には分かっている。

問題を抱えているのは

僕だけではないことも、

みんな、抱え切れないトラブルを持つているのを

僕には分かっている。

君の死に、僕が大きくかかわっているのを
それに僕は気付かない振りをしているのを

あの時、僕が電話にでさえしていれば

君は死ななかつた事も

あの時僕がもつと早く帰つてさえいれば

君は死ななかつた事も

僕が壊れているのは

君の死のせいではなく

それより、ずっと前から壊れていた事も

きつとその事が君の死の原因になつていた事も

それでも僕は

君に言つて欲しいんだ

僕を許してくれるつて。

もうがんばらなくていいつて。

僕は君の傍に

行き
たい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9787e/>

長いお別れ

2010年11月5日07時17分発行